

100213マイスターネット第43回資料

日本の一学生が見たフィンランドの教育現場

平成22年2月13日

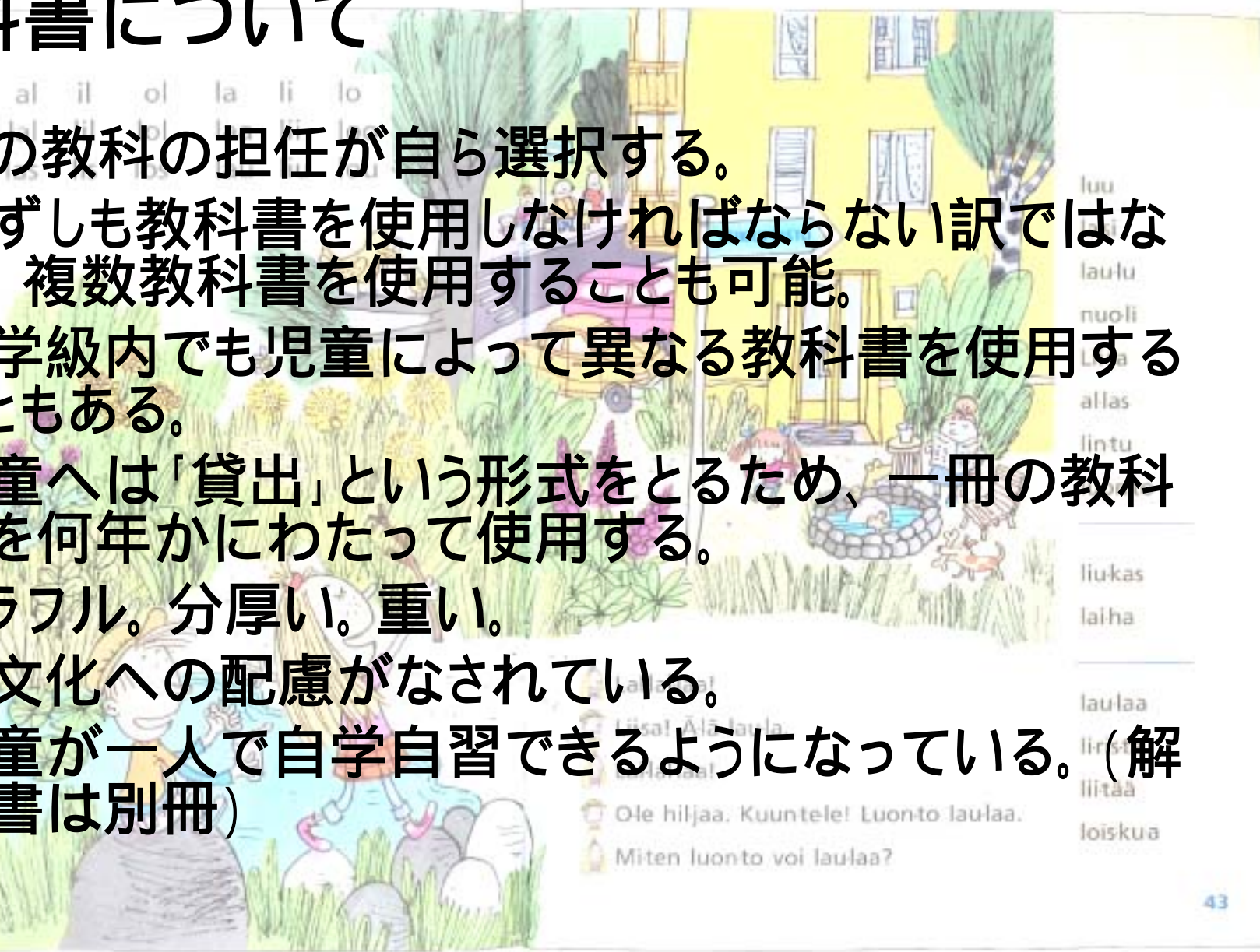
岡島さやか

- 7歳になった年の8月が入学時期とされているが、実際に1年生の教室には6～9歳の異年齢の児童が混ざっている。
- 授業料、交通費、教材費、給食費など学校にかかる費用はすべて無償。医療費、歯科治療費なども無償。
- 保護者は学校選択権を与えられている。
- 学級担任が特定の教室でほぼ全ての教科を教える。
- どの学校にも補助教員が必ずいる。
- 一学級の人数は10～25人程度。それより少ない場合は複式学級形式を取り、多い場合は学級数を増やして対応。

- 入学時から卒業時まで原則クラス替えはない。
 - 担任は6年間持ち上がりの場合と、担当学年が決まっている場合とがある。
 - 教員の学校移動は本人が希望しない限り、原則としてない。
 - 全校児童99人以下の小学校が多い。
近年児童数30人以下の学校は統廃合される傾向にある。
 - 大規模校には図書室や保健室のような設備が付属していることもあるが、必ずしもある訳ではない。
- | | |
|--------|------------------|
| 必ずあるもの | 更衣室、シャワー室、パソコン |
| ほぼあるもの | 食堂、体育館、サウナ、屋根裏、森 |
| ないもの | 下駄箱、プール、学校菜園 |

教科書について

- その教科の担任が自ら選択する。
- 必ずしも教科書を使用しなければならない訳ではない。複数教科書を使用することも可能。
- 同学級内でも児童によって異なる教科書を使用することもある。
- 児童へは「貸出」という形式をとるため、一冊の教科書を何年かにわたって使用する。
- カラフル。分厚い。重い。
- 多文化への配慮がなされている。
- 児童が一人で自学自習できるようになっている。(解答書は別冊)



al il ol la li lo

luu
laulu
nuoli
allas
lintu
liukas
laiha
laulaa
liitää
loiskua

Ole hiljaa. Kuuntele! Luonto laulaa.
Miten luonto voi laulaa?

フィンランドの授業中大切にされること

- 「話を聞くこと」
- 「考えること」
- 「自分のペースで学習すること」
- 「他者と関わり自立すること」

学校教育で大切にされること

- 真理、善良、美しさ(トゥルネン) / 文化相続遺産の転換(ラウノネン & プルッキネン)
- 平等に基づく人権の尊重
- 個人の確立、自立
- 多文化への寛容
- 社会構成主義的学習
- 社会の更新
- 持続可能性の探求

個別学習

- フィンランドの小学校で基本となる授業体系
- 算数、国語で特に多くみられる。
- 児童によって使用するワークやページが異なることや、宿題の箇所が異なることも多い。
- 教員が採点する場合と自己採点の場合がある。
- 「学習は自分でするもの」という基礎的な学習姿勢を身に付けることを目的とする。
- 「一斉授業の合間の個別学習」というよりは「個別学習の合間の一斉授業」という姿勢
- グループ学習は、個別学習の姿勢が確立した頃を見計らって導入される。

外国語教育

- 外国語教育を通して自国の多様性に目を向けることを促す。
- 小学3年生以上は第一外国語が必修。小学4年生から第二外国語を選択することもできるが、自治体によって異なる。
- 聞く・話す为中心と言うが、実際にはかなり文法事項が入り、読み書き能力も要求される。
- 小学6年生で、日本の中学3年生程度の英文を読む。
- 英語の上達度は児童の学校外の生活環境にどうしても由来してしまう。

国語教育

- 小学校入学時に読み書きができる児童は半数程度。ほぼ一年かけて全アルファベットを学習する。
- 中学年程度まで本の読み聞かせを授業の中で頻繁に行う。
- 学校図書館は併設されていない場合が多いので、週に一度来る移動図書館を利用する。
- 学級文庫は日本ほど一般的ではない。
- 読書は大切という意識が広く国民に根付いている。

- 日本の国語の授業とは印象が異なる。
- 授業中ノートを取ることはまずない。
- 低学年は書写に多くの時間が割かれる。
- 書写の一環として、教員が話すことをそのまま写す訓練を行うことも多い。
- 文を書く練習は部分的かつ段階的に行う。
- 高学年になるほど、授業に文法が占める割合が高くなる。
- 近年はパソコンを用いた授業も多く活用される。

手工芸

- 就学前学校から導入される、子どもたちの圧倒的人気を誇る授業。
- 想像力、計画性、柔軟性や忍耐力の育成や、物をつくり出す喜び、達成感や充足感を味わうという狙いがあるとされる。
- 主体的に考え行動する姿勢を育むという役割も持つと考えられる。
- 低学年時には教員の指示によって制作するが、徐々に児童自身が制作したいものを選択(想像)し、材料を申請し、作るようになっていく。

特別な支援を必要とする児童への援助

- 心理カウンセラーや医師の診断を経て何らかの支援が必要とされる場合と、教員が学校生活の中で援助の必要性を発見する場合に分けて考えられる。
- 補習、特別対応、特別カリキュラム、特別学級といった対応に大まかには分けられる。
- 「支援を必要とする」＝「成績が悪い」ではない。学習態度上の課題や友人関係上の課題がある場合にも支援の対象となる。

< 補習 >

- 特定の教科の特定の単元に理解の遅れが見られる際に、急遽行われる支援。
- なるべく普段の学習の中で発見できるように努められている。
- 始業前や放課後に保護者の了承を得て行われる。
- 個別、または少人数グループで、担任教員または補助教員や特別教員が指導に当たる。
- 成果が見えれば適宜終了となる。
- 教員には手当が支払われる。

< 特別対応 >

- 学習に大きく支障の無い軽微の障害が見られる場合や、短期的な情緒問題が見られる場合に行われる措置。
- 心理カウンセラーや特別支援教員による取り出し授業などで対応
- 課題が解決すると適宜終了とする。

< 特別カリキュラム >

- 通常カリキュラムでは効果的な学習が困難な児童は、自分専用のカリキュラムを作ることができる。
- 年に一度、担任教員と特別支援教員、校長、保護者と共にカリキュラムの点検を行う。
- 週数時間、特別支援教員との学習の機会をもつことが多い。

< 特別学級 >

- 特別カリキュラムをもった児童が集まる学級。
- 複式学級であることが多く、児童数は一学級あたり5～10人程度。担任教員の他補助教員が1～2人つく。
- 児童は困難がある教科においてはこの学級を利用し、問題がない教科については通常学級と合流する。
- 特別学級の授業には様々な工夫がなされている。
- 自治体によっては特別学級をもたない。
- 最終的には通常学級での学習を目指す

< 特別支援教員 >

- 大規模校には常駐するが、中・小規模校の場合、日替わりで各学校を巡回する。
- 支援が必要な児童のみでなく、通常学級で授業をもつこともある。
- 取り出し授業は特に低・中学年には高い人気がある。
- 取り出し授業では学習指導の他、学習に関連したゲームを多用する。
- 学習や学校を少しでも楽しくすること、学習や家庭の困難による二次的困難(非行、不登校など)を防ぐことも大きな目的である。

教科横断的な学習

- コア・カリキュラムには統合的学習として7テーマがあげられている。
- 学校で一つ、あるいは複数を組み合わせて設定している場合と、学年で異なる場合、自治体で共通としている場合などがある。
- そのための時間を定期的にとって扱う場合、不定期で扱う場合、行事として単発で扱う場合など学校によって異なる。
- カリキュラムに記載された時間とは別の、普段の授業の中で行われる「統合的な学習」の方が一般的。

学校設備

- 学校規模、建築年 / 改築年、地方によって異なる。
- 町の中心にある大規模校は最新の設備を備えていることが多い。

職員室

- 職員室はくつろぐ所。
- 仕事は自分の教室か自宅で。
- 校長は教室と別に専用の机を持っていることが多い。

教室

- 広さや高さはその教室によって異なる。
- 学級担任のものと考えられるので、児童にとっては「担任が替わる = 教室が替わる」。
- 机の配置は担任教員が工夫する。
- 各教室に水道及びコンピュータが設置されている。

学級

- 一学年の人数が安定して12,3人以上になるとその学年だけでの学級編成をとる。それ以下の場合には原則として複式学級を採用。
- 全校児童数が35人を下回ると全校2学級にするのが一般的。
- 一学年の人数がどの学年も安定して25人を上回るようになると二学級に分けるが、34人だからと必ずしも17人ずつに分けるのではなく、教員の力量や児童の性格を考慮して15人学級と19人学級に分けるといったことも行われる。
- 先生方の感覚としては、「一学級20人が限度」、それ以上いる学級に当たった場合は「覚悟が必要」。

学校給食

- 義務教育期間内は無償
- 一日一回必ずあり、午前授業や夜間授業の際にも用意される。
- 内容は主食となるジャガイモか米かパンと肉か魚、サラダ、牛乳。あるいはスープとパン。クラッカーが毎日ついてくる。
- 約40日で一周するように献立が構成されている。
- センター方式と自校方式とが混在している。
- 児童らは自分の分を自分で配膳し、片付ける。

休み時間

- 児童は休み時間には必ず外に出なければならない。
- 低学年のうちには遊んでいるが、高学年になるとただ立って話しているだけの児童が目立つようになる。

学校行事

- 児童・生徒からお金を徴収することは禁止されているので、資金集めのためバザーを開いて資金を調達する。
- 日本の学校に比べると行事にかける時間数は少ない。
- 保護者が参加する行事は平日夕方より行われる。父親の参加も一般的。